



落葉 / *La Hojarasca y Otros Cuentos* (1972)
／G・ガルシア＝マルケス(高見英一訳)／新潮社
(1/25刊・¥1,300)

マルケスの初期中編と一短編、それに比較的最近の五短編を収録する作品集。どの物語も、マルケスの以後の長編『百年の孤独』や『族長の秋』(未訳)に連なる要素を持っている。その点、入門書としても、適しているだろう。

南米のどこかの町マコンドに住む老大夫、その娘と少年、妻、かつて同居人だった博士、インディオの女——大佐の家族たちの、博士と女に対する心理が、互いに錯綜し合う中に、この町の歴史が浮かび上がっていく『落葉』。五〇年代の初期作品で、『百年の孤独』の原型である。

そのほか、庭に墜ちた老天使「大きな翼を持った老人」、パラードの「溺れた巨人」を思わせる「世界中で最も美しい男の溺死体」(パラードの三年後に書かれている)。切れ目のない文章で、えんえんと語られる「幽霊船の最後の航海」等。以上、六〇年代後半に発表された短編は、各々がある独裁者の話『族長の秋』の文体を反映しているという。

これらの実験的手法が、どのように生かされているのか、興味深い。今後の訳出を待ちたい。(俊)